

まえがき

「軍事政権が席卷した20世紀後半のラテンアメリカにおいて、長期にわたり政党制民主主義を堅守して政治的安定を維持した例外的な国」,「石油経済の進展により大土地所有制が崩壊し、社会階層間のモビリティが高いため、階層間関係が近隣諸国ほど絶対的でなく、異なる社会階層や人種の背景をもつ人々が相対的調和のなかで共生する社会」。多くの政治社会的矛盾を内包しつつも、これらの言説のもと現実を直視することを避けてきたベネズエラ社会に対して、それらが単なる幻想にすぎないことを突き付けたのが、ウーゴ・チャベス大統領であった。多階層にまたがる政治基盤を構築していた伝統的政党のもとでは見えなかった社会階層や人種といった差異を、政治対立の軸に据えたのは、同国の歴史においてチャベス政権が初めてであった。階層間対立を感情的言説で扇動するチャベス大統領のもと、ベネズエラ社会は二極化を深め、それまで政治社会的「調和」のなかで生活してきたと思っていたベネズエラ人は、同僚、隣人、友人、そして家族の間においてさえも、政権への支持・不支持をめぐる対立に巻き込まれていった。チャベス大統領はベネズエラの政治経済に大きな変革をもたらしたが、彼がベネズエラ社会にもたらした最も大きなインパクトは、この幻想からの目覚めと二極化だったといえるだろう。

本書は、2013～2014年度の2年間にわたりアジア経済研究所で実施された研究会「チャベス政権下のベネズエラ」の成果である。チャベス大統領の登場によって日本でも注目されることが増えたベネズエラだが、同国に関する情報は日本ではまだ限られている。ベネズエラの歴史に良くも悪くも大きな軌跡を残し、また21世紀初めのラテンアメリカ地域において大きな影響力をもったチャベス政権について、日本語で総括する書籍を作りたいというのが、本研究プロジェクトを立ち上げた理由であった。

本研究会には、日本人研究者2人に加え、ベネズエラ中央大学開発研究所（Universidad Central de Venezuela, Centro de Estudios de Desarrollo: UCV-

CENDES) の研究者 3 人が参加している。また、まとまったデータが存在しないベネズエラの政治、社会、外交分野の情報について、ベネズエラにおいて調査アシスタントの協力を得て独自のデータベースを作成した。その結果は各章に反映されている。

本書の出版にこぎつけるまでには多くの方々のご協力を頂いた。各章の執筆者にとって重要な情報源となったデータベース作成を担ってくれた Silvia Salvato, Jorge Luis Díaz Ramírez, Kleber José Alonso, Lesly Larez の 4 氏、ベネズエラ人委員 3 人が来日した際に貴重な意見交換や情報発信の機会を頂いた上智大学の幡谷則子氏、京都大学の村上勇介氏、慶應義塾大学の岡岡直也氏、また本研究プロジェクトの運営面で強力にサポート頂いたアジア経済研究所の半田真奈美氏と川名洋二郎氏、原稿を丁寧に読んで頂き貴重なご意見を頂いた 2 人の匿名査読者の方々、そして本書編集にあたってご協力頂いた遠藤弘氏に執筆者を代表して心より御礼を申し上げたい。

最後に、編者および 3 人のベネズエラ人執筆者にとっての恩師であり友人でもある、そして長年ベネズエラの政治社会学研究を牽引された、元 CENDES 所長ハインツ・ソントグ (Heinz Sonntag) 教授に本書を捧げた。

2015年11月

編者